大学における初修外国語の１回目の授業について

――初修中国語の例――

郭　　春貴・操　　智

（受付　2017 年 10 月 31 日）

0.

大学における初修外国語（第２外国語とも言う）は専門科目ではなく，教養科目の一環であり，履修形態は１年間週１回または２回の授業である。その授業で何ができるか，その意味についての議論と研究も少なくない[1]。一方，多くの大学で今でも存在していることからもその意義が理解されていると思われる。存続するにしても，削減するにしても，初修外国語の将来は大学の経営者と担当教員にかかっていることもよく言われる。中でも教師の担う責任がより重要のではないかと思われる。

授業の質の良さ悪さは当然教員と関わるので，教員の教え方はどんな段階の教育においても重要である。「始めよければ，終わり良し」と言われるように，１回目の授業は極めて大切だと考えられる。本研究は中国語の授業を例として，教員と学生の調査，授業見学に基づいて，１回目の授業の大切さと問題点を分析して，またどのように行われればよいかを提案したい。

1.　大学における初修中国語授業の問題点

大学における初修外国語の問題点は，（郭春貴 2007）にすでに記したとおり，学会の重視度は少し改善したが，ほかの問題点は依然として状況が変わってない。ここでもう一度簡単に以下のようにまとめる。

1.1　大学の重視度が低く，専任教員も少なすぎる。

1.2　学会の重視度も低く，教育に関する研究発表も少ない。

1.3　教員の業績を重視しすぎ，教学を軽視する風潮がある。

1.4　教育目標と内容が統一されず，非常勤講師任せが多い。

1.5　大人数の授業で語学授業か教養授業か曖昧である。

時代が変わって，以下の新たな問題も生じた。

1.6　学習能力の低い学生が多くなった。

全入時代と言われる2010年から，多くの大学は経営のために，学生を確保する必要があり，学習能力が低い学生でも入学させていることは否定できない。そのような学生は何のために大学に入るか，何を勉強すべきかもほとんどよくわかっていない。ましては初修外国語を学習する意味についても理解できないという現状である。現在，レベルが高い国立大学以外，多くの地方の国立大学も私立大学も学生のレベルが10年前よりずっと低いので，「英語もできないのに，別の外国語を習う必要がない」，「日本語もちゃんと使えない学生に初修外国語を習う必要がない」とも言われている[2]。学習能力が低い学生は初修外国語を習う意味についてあまり理解できないだけではなく，学習意欲も薄いので，どのように教育するかも難しい問題である。

1.7　クラスでの学生はレベルの差が顕著になった。

講義授業は受講生が多くてもなんとかなるが，語学授業になると，講義ではなく，練習と発表が多いので，30人でも多いと言われる。1.5 でクラスの人数が多いと言ったが，レベルが同じならまだ何とか教えられるが，レベルがまちまちになると，教員がうまく教えられないことが多い。語学の授業は理解してから，応用練習が必要なので，理解できる者はすぐ応用できるが，理解できない学生は応用練習の段階に全然入れないので，全体の教育成果が得られない。英語はすでにレベルによってクラスを分ける大学が多くなったが，初修外国語はすべての学生にとって，初修だと思われ，クラス分けの必要がないと思われている。実際は語学の学習は学習能力と深く関係があるので，学習能力の違う学生が一緒に学習することにより，能力が低い学生はますます劣等感を感じるのではないか。

2.　大学における初修外国語の必要性

2.1　文科省の学士課程の指示を考える。

平成20年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で示された「学士課程共通の学習成果に関する参考指針」にあげられた項目に「多文化，異文化に関する知識の理解」と「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能に日本語と特定の外国語を用いて，読み，書き，聞き，話すこと」がある[3]。その指針には初修外国語と明記してないが，英

語を含め，初修外国語と考えてもよいと思われる。また，2001年の内閣府の世論調査では「これからの大学生が身に付けるべきと思われる外国語」として，英語は当然最も多い92％だが，その他に中国語（59.6％），フランス語（26.5％），韓国語（25.6％）などが挙げられていた[4]。したがって，大学教育では異文化理解の知識としても生活技能としても初修外国語の必要は文科省だけではなく，一般社会からも要求されている。

2.2　地球視野は英語視野ではない。

経営の状態や学生のレベルが低い時，大学側は安易に初修外国語の授業を削減する[5]。しかし，中教審は2002年に「新しい時代における教養教育の在り方について」[6]，2017年に「我が国の高等教育の将来像」の答申[7]で，教養教育の授業性を再確認し，異文化の理解と国際視野の知識の重要性にも触れた。異文化理解と国際視野の知識は英語だけではない。グローバル化になっている現代社会，日本と世界の関係を考えると，異文化を理解するいろいろな外国語が若い世代に必要不可欠な技能と思われる。そのために大学における英語と初修外国語の重要性は軽く見るべきではない。英語だけがグローバル化ではなく，ほかの外国語も大切である。新しい時代に生きるために，若い人に英語だけではなく，もう一つの外国語が必要であることは大学側がぜひ理解しなければならないのではないか。

2.3　レベルが低い学生にもっと履修させるべきである。

学生のレベルが低く，判断力が弱くなったので，楽な方に流される傾向がある。大学側が必要と思われる科目を学生に必修させないと，レベルが低い学生はその必要性を理解できず，学習意欲が生まれない。文科省の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」に示されたように，大学の教育で異文化理解の知識としても生活技能としても初修外国語が必要だとわかれば，どんなレベルが低い大学生に対しても大学側は教育する責務があるのではないか。学生は高い授業料を払っているので，安易に「英語だけで十分」「英語さえできない，初修は無理」と考えたら，レベルが低い学生の学習の場がますます狭くなり，レベルはますます低くなるのではないか。

2.4　少人数の初修は学生の学習能力，学習習慣を育てられる。

語学の授業は語学だけではなく，毎週継続する継続力，単語と文法を理解する理解力，覚える記憶力，作文する応用力，会話発表の表現力なども育てられる。特に一年生の授業はほとんど大人数で，一方的に聞くだけの授業ばかりなので，高校を出て，初めて大学の授業を受ける１年生にとって，少人数の語学授業（英語も初修も）は極めて貴重である。英語だけではなく，初修外国語の授業は，学生の能力と習慣を鍛えられることを無視できない。

3.　1 回目の授業の問題点と重要性

3.1　以上，初修外国語授業の重要性と必要性を述べたが，その責任の重大さを担当教員（専任も非常勤も）も理解して，１つ１つの授業が大事に行われていると思われる。特に最初の授業が肝心だと思われる。毎年，英語と他言語の教員が筆者（郭）の授業を見学した後，「学生が生き生きして楽しく学習しているのが大変印象的で，最初の授業はどのように行われているか見学したい」という意見が多かった。語学の教員なら，１回目の授業は極めて重要で，後の授業の成功や失敗に大きく関係することを知っている。学生が大学に入学して，初めて大学の授業を受けて，緊張しながら，真剣に聞いているに違いない。その印象は後に大きい影響があると思われる。

初修外国語は学生にとっては正しく初修で，初めて出会い，初めて学習する外国語なので，１回目の授業で教員に対する印象，授業を受ける印象はこれからの学習の上で極めて重要であるに違いない。

以下，初修中国語の１回目の授業の問題点について論じる。

3.2　1 回目の授業の問題点。

3.2.1　大学の初修外国語の目的を理解できずにすぐ発音から教えること。

多くの初修中国語の若い教員，特に中国人の教員が意外と大学における初修中国語の教育目的を理解せずに，自分が中国で受けた外国語の教育方法で，１回目の授業ですぐ一生懸命にテキストに沿って，難しい発音を教える。学生は教員の熱心さが分かるが，中国語に対する恐怖感が生じ，難しい言語と思い込んで，興味がなくなることが多い。

3.2.2　毎年同じような方法で授業を行うこと。

初修中国語の内容は毎年同じであるので，多くの古い教員はあまり準備せず，何年間もずっと同じ方法で授業を行う。自分も面白くないので，学生も当然興味が湧かない。しかも，時代が変わって，学生のレベルと考えも変わるので，以前の方法で教えても，新しい時代の学生にとっては面白くないかもしれない。

3.2.3　学生のレベルを理解せず，すぐ授業を行うこと。

教育で一番大切なのは，中国語で言うところの“因材施教”（対象に応じて異なる方法で教える）なのに，大学における初修中国語の授業は結構難しい。特に一部の教員は１回目の授業でまだ学生のレベルが把握してないのに，すぐ難しい発音を教えことがあり，学生の中国語に対する興味がなくなる恐れがある。

3. 2. 4　ガイダンスだけで10分か15分で授業を終わらせること。

一部の初修中国語の教員は大学における初修外国語の意味と目的を理解せず，大学のぬるま湯の環境に慣れて，教育の情熱がなく，学生にも無関心で，学生の授業の理解度にも関心がない。そのような教員の１回目の授業はわずか10分か15分間のガイダンスですぐ終わらせて，学生も喜ぶと思い込んでいる。結局，学生にとっての１回目の授業の印象は情熱がなく，いい加減で，楽な授業というだけで，中国語の興味が生まれてこない。

4.　1回目の授業の準備

初修外国語の１回目の授業の重要性と問題点を理解すれば，その授業を軽く見てはならないと思われる。１回目の授業のよし悪しはかなりその後の授業に影響があると考えられる以上，大事に教えなければならないことは言うまでもない。

大事な授業なので，きちんと以下のような事前の準備をすべきだと思われる。

4.1　事前に名簿をもらって，学生の人数と名前の中国語の読み方をチェックする。

学生の人数を事前に把握したら，授業活動の時間を組み立てられる。人数が少ない場合は余裕をもって，説明と練習の時間が多く作れる。逆に多い場合は説明と練習の時間は当然少なくなるので，準備する段階がとても大事になる。それから，日本人の苗字は時々現代中国語にはない国字があり，例えば「辻」「峠」「畑」など初めて出会う教員はほとんど読めないので，その読み方を大漢和辞書や国語辞典で事前に調べる。学生の名前の中国語読みは１回目の授業で教えなければならない。それは学生にとって異文化理解の第一歩で，不思議と思いながら興味が湧いてくる。

4.2　教室の広さを知り，座席表を作っておく。

語学の授業は練習が多いので，学生にバラバラに座らせると，二人ずつの会話練習が難しくなり，時間がかかりすぎる。最初から座席を決めて，前期だけでも固定したら，授業の運びが早くなり，学生の名前も早く覚えられるので，学生との距離感が近くなる。名前を覚えたら，練習させる時に一々名簿を見なくても指名でき，時間の節約になるだけでなく，学生が教員の熱心さと親近感を感じられ，授業の興味が一層高くなる。

4.3　具体的な授業の内容と活動などを準備する。

90分の授業時間にどのように配分するかをよく考えて準備する。例えば，①学生の座席を決めること，②全員に自己紹介させる，③授業の約束，④中国語について，④中国語の学習

について，⑤“你好”（今日は！），“谢谢！”（ありがとう），“再见！”（さようなら）など5つぐらいの簡単な挨拶を教える。⑥中国語の歌かテキストの会話をちょっと聞かせる。⑦4つの声調の紹介など。以上にあげた内容はとても90分間ではできないかもしれないが，とにかく，80分ぐらいの内容と活動を準備して，5分間の余裕をもって，残りの5分間は質問の時間にあてればいいのではないか。

授業で必要な資料，例えば，座席表，中国の最新データ，中国語についてなどは事前に人数分をコピーして置く。それから必要なら中国を紹介する映像資料や写真，あるいはPPTなども用意しておく。

4.4　授業のやり方と約束を準備して，事前に人数分をコピーしておく。

授業のやり方と約束を具体的に書いておく。例えば，この授業は会話中心か文法中心か，会話ならどのように会話を教えるか。例えば，テキストの会話文を暗記する，二人ずつで発表する，聞き取り，宿題の提出方法，評価する方法などを明記しておく。

同時に，授業の約束も明記する。例えば，出席を重視するだけではなく，5回欠席したら，試験を受ける資格がなくなる。遅刻3回は欠席1回とする。テキストは忘れたら遅刻とする。授業中は携帯をいじることと寝ることは，欠席とする。宿題を3回提出しないと欠席とするなど。この約束は若い学生に授業の真剣さを実感してもらうためである。

5.　具体的な1回目の授業の内容の提案

5.1　教室に入って，まず明るい声で学生に中国語で“大家好！”を言って，皆に互いに“你好！”言わせる。そして，すぐ黒板に今日の授業の内容活動を書く。学生に今日はどんな内容かなと心の準備をさせる。以後も毎回授業内容を必ず黒板に書く。例えば，

①　座席を決める
②　自己紹介（名前，趣味，なぜ中国語を履修，この授業への要求）
③　この授業のやり方と約束
④　中国語の履修について
⑤　中国語について
⑥　挨拶用語
⑦　楽しい時間（学生に自由に質問させる時間）

5.2　その次は二人1組の座席を決め，会話練習のためと言えば，学生は喜んで2人1組で座る。

5.3　席を決めたら，座席表を回して，みんなの名前を書いてもらいながら，すぐ全員の自己紹介をする。まず教員から，その後名簿を見ながら，学生一人ずつに自分の名前，趣味，なぜ中国語を履修するか，授業に対する要求だけを話してもらう。終わったらすぐその学生の名前を中国語の読み方を２回読んで真似して言ってもらう。その時，必ず「発音がいいね」とほめる。出席を取る時に使うので，絶対覚えてくださいと言えば，みんな結構楽しく覚える。

5.4　簡単に授業のやり方，約束について紹介する。

事前に準備した授業のやり方と約束のコピーを配って，コピーに沿って，１つずつ説明していく。あまり厳しくないように笑いながら説明するのが肝心である。最後にその紙を毎回自分で確認してもらうために，毎回授業に必ずもって来るように指示する。説明の後に必ず学生に納得するために，質問をさせる。

5.5　中国語の履修についての紹介。

学生がいろいろな初修外国語から中国語を選ぶのは入学前である。自己紹介させた後に，一部の学生から「なんとなく」「特別な理由がない」「高校の先生から勧められた」などの意見が毎年必ずあるので，そうした学生のために，元気づけて，興味と学習意識を高めるために中国語学習のメリットについて簡単に話す必要がある。例えば，

①　日本の最大貿易国でもある。在日中国人は60万人もいる。日本の経済に大きい影響力を持っているので，中国語ができると，将来，就職する時は一助になる。

②　世界で人口が一番多い国（13億）で，世界中の華僑を含めると，どこへ行っても中国人に出あう可能性が極めて高い。その時に中国語は身を助けられる。

③　中国は日本の隣の国で，「遠い親戚より近くの他人」。歴史から見ても，両国の交流が密接である。現在日本にいる留学生の中で中国人の留学生が一番多く，約10万人いるので，お互いに相手の言葉や文化を学ぶべきである。

学生はテレビやネットなどのマスコミに振り回されることがあるので，中国に対するイメージは決してよいとは言えないことを注意しながら，話し方があまり強くならないように，事実だけを淡々と述べる。

簡単に中国を紹介する映像を５分間上映しても学生の興味を引き起こせる。

5.6　中国語がどんな言語かについて簡単に紹介する。（資料やテキストに沿って）

テキストはまだ購入してない学生が多いと予測して，人数分の資料をコピーすればよい。そのあと，コピーかテキストに沿って中国語はどんな言語かについて，以下のように簡単に

説明すればよい。

①　漢字だけの言語。日本語の漢字は中国から伝わって来たものなので，たくさんの同形同義の漢字があり，日本人にとって学びやすい言語である。例えば，“大学，学校，日本，中国”など。しかし，発音は日本語と違う。

②　文法は簡単で，英語のような名詞の単数複数，人称による動詞の語尾の変化などが，中国語にはない。“一个人”（一人）も“两个人”（二人）も“人”，日本語と同じく変化がない。

③　英語と日本語のように，現在形，過去形，未来形のテンスもない。「行く」の“去”は過去も現在も将来も“去”を使い，前後に語句の追加だけで動詞のテンスがない。

④　中国語は語順がとても大切で，基本は目的語を動詞の後に置く。英語と似ている SVO。

⑤　中国語は日本人にとって単語と文法は簡単で，発音だけが難しいと言われるが，発音はどこの国でも特徴があるので，難しいというより違うだけである。例えば同じ単語の today はアメリカ英語とオーストラリアの英語では発音が違う。Can't もアメリカ英語とイギリス英語が違う例を出して，発音の違いは当然で難しくないということを説明する。

5.7　簡単に中国語の 4 つの声調（mā má mǎ mà）を紹介するが練習はしない。学生にテキストを早く購入して，声調の部分を CD で聞く宿題を与える。

5.8　簡単な挨拶用語を学ぶ。

以上の 7 点は人数が多い場合は時間が足りないと思われる。5. 6 の中国語についてはテキストに書いてあれば，テキストを読んでもらう。テキストがなければ，資料を配って，学生に家で読んで，質問を考えさせてもよい。最後に必ず簡単な挨拶の練習をやる。

授業アンケートの自由記述に，一番面白い授業内容を書かせたところ，「会話が一番面白かった」という記述が多かった。学生に外国語授業の楽しさ，面白さを感じさせるのは会話の練習に尽きる。文法などを聞かせるよりも，友達と外国語で会話の練習するのが一番であるので，１回目の授業はその会話でしめくくった方が効果が高いというのが我々の経験である。

よく使われる“你好”（今日は）“大家好”（みなさん，今日は）“老师好”（先生，今日は）“谢谢”（ありがとう）“不客气”（どういたしまして）“再见”（さようなら）を用意し，発音はまだ習っていなくても心配せず，ひたすら学生に真似させて，３回読んだら，隣の学生と会話する練習をさせて，一組か 2 組に発表させたら，クラスの雰囲気が一気に楽しくなり，学習意欲も高められる。

5.9　最後に楽しい時間を設ける。

会話の練習のあと，最後の５分間で楽しい時間を設けて，学生に自由に質問させる。最初は学生はほとんど静かで，何も質問しないことが多い。教員は我慢して，質問の大切さを説明したりする。それから例を出す。例えば，「中国語はどういうところが難しいか」「先生は何か国語が話せるか」「先生はいつ日本に来たか」など。しばらくすると，必ず一人か２人が手を挙げて，質問をする。どんなつまらない質問でも受けて，簡単に答えればいい。答えたくなかったりわからない場合はわからないと言えばいい。

5.10　授業が終わるときは，必ず中国語で互いに挨拶をする。

教員は“下课”（授業が終わり），学生は“谢谢老师”と言って，教員は“不客气”と返事をする。教員は“再见”と言って，学生は“老师再见”と言ってから授業が終わる。これは授業の面白さを印象づけるためである。

6.　ま　と　め

6.1　大学における初修外国語が軽視されている現在，再検討する必要があるのではないか。学生の立場と教育の使命から考えなければならないのではないか。果たして，学生のレベルが低く，やる気がない，英語ができないという理由で，学生に初修外国語を教えなくてもよいのか。本当に学生のことを考えているか，それとも経営だけを考えているか。できない学生は，ゆっくりと教え，高い要求ではなくて，低い目標を設定すればよいのではないか。学生にいろいろ勉強のチャンスを与えるのは，単に自由の選択という大義名分ではなくて，文科省も大学も必要だと思えば，選択必修にして，学生が大変でも学習することが大事なのではないか。楽な方に流されたら，本当の教育とは言えないのではないか。

6.2　全ての教育の核心は教員である。教員は情熱を持ち，授業の教育法を研究し続ければ，必ずその授業の質が高くなる。初修中国語を含めて，全ての初修外国語の教師も重要である。授業のよし悪しは教員次第である。初修外国語を守るために，教員の努力と研究が欠かせないと思われる。

学生の学習意欲と興味を高めるのは教員の責務に違いない。もちろん，１回目だけではなく，全ての授業を熱心に教えなければならないが，「始めよければ，終わりよし」のように，１回目の授業が極めて重要であることも否定できない。１回目の授業に心を込めて，いろいろ準備をして，いろいろ授業活動を工夫して行えば，学生に必ず通じる。必ず学習意欲も興味も高まっていく。その後の授業もスムーズに行われると思われる。

注

1. 泉水浩隆「日本（の大学）における第２外国語教育をめぐる現状と課題――スペイン語教育中心に――」武田修志「大学における初習外国語教育の意義について――ドイツ語科目を例にして」岩崎克己「日本の大学における初修外国語の現状と改革のための一試案――主にドイツ語教育を例にして」郭春貴「大学における第２外国語の中国語教育の位置づけ」
2. 「変わりゆく第２外国語」『朝日新聞』2008年５月26日
3. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm（アクセス日：2017年10月29日）
4. http://survey.gov-online.go.jp/h13/h13-daigaku/index.html（アクセス日：2017年10月29日）
5. 「変わりゆく第２外国語」『朝日新聞』2008年５月26日
6. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/1263500.htm（アクセス日：2017年10月29日）
7. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1383080.htm（アクセス日：2017年10月29日）

参　考　文　献

1. 輿水　優　2005『中国語の教え方・学び方――中国語科教育法概説』日本大学文理学部叢書
2. 田中慎也　1994『どこへ行く？大学の外国語教育』三修社
3. 関口一郎　1993『慶應湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦』三修社
4. 国際交流基金　日本語教授法シリーズ１　2009『日本語教師の役割／コースデザイン』国際交流基金
5. 村野井仁　2006『第２言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館
6. ジャック・C リチャーズ＆シオドア・S・ロジャーズ著　アントニー・アルジェイミー＆高見澤孟　監訳　2007『世界の言語　教授・指導法』東京書籍
7. 岩崎克己　2007「日本の大学における初修外国語の現状と改革のための一試案――主にドイツ語教育を例にして」『広島外国語教育研究　10号』広島大学外国語教育研究センター
8. 武田和恵　2010「大学における外国語教育の現状について」『言語と文化　第22号』文教大学大学院言語文化研究科附属言語文化研究所
9. 泉水浩隆　2009「日本（の大学）における第２外国語教育をめぐる現状と課題――スペイン語教育を中心に――」『学苑　No. 821』昭和女子大学近代文化研究所
10. 番場　俊・千野真一　2009「総合大学における初修外国語教育の新しいあり方をめざして」『大学教育研究年報　14号』
11. 武田修志　2005「大学における初習外国語教育の意義について――ドイツ語科目を例にして――」『鳥取大学大学教育総合センター紀要　第２号』鳥取大学大学教育総合センター
12. 郭　春貴　2007「大学における第２外国語の中国語教育の位置づけ」『広島修大論集　第48巻　第１号（人文編）』広島修道大学

Summary

Study of The first lesson of the Chinese class in Japanese University

Kaku Haruki and Cao Zhi

This paper studies about the necessity and importance of the second foreign language, such as Chinese education in Japanese university. It is the inevitable demand of the internationalization times for young students to study another foreign language besides English. Since the second foreign language education is important, the first lesson should have to pay more enthusiasm and well preparing because “Good start will lead to a better result.” This study also suggests some teaching methods and activities for the first lesson of Chinese class.